滋賀文化財だより
NO. 134
1989. 3. 7
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

162．中世近江における前室付社殿の２つの系統について

はじめに

前室付流造は上代に成立した京都賀茂神社の社殿形式である「流造」を祖形として中世に発展した神社本殿のひとつである。

流造は３×２間の身舎に前１間通しの庇（向拝）を持つ平入りの社殿であるが、中世において通常の流造が身舎を前後２通りに分割して内、外陣を設けたのに対し、前室付流造は庇部分を室内に取込み前室(外陣)とした社殿である（その結果平面は３×３間となる）。

中世の前室付流造を考える上で滋賀県は特に重要な地域で重要文化財（国宝含む）指定のうちでは苗村神社西本殿（竜王町、徳治３年）が最も古く、また棟数も全国の約半数の14棟が集中している（京都府には２棟あるが奈良県、大阪府にはない）。

また滋賀県指定有形文化財が２棟ある他、屋根形式こそ違うものの平面は全く前室付流造と同じ入母屋造と春日造の社殿が各１棟ずつある。

本稿はそれらを19棟（表参照）を前室付社殿と総称し前室の構造を中心に比較検討したものである。

前室付社殿の２つの系統

前室の構造を比較すると、前室が身舎に比べ非常に開放的で軽ろやかな建具をもつ社殿と身舎と同じ構造をもち前室正面しか建具を置かない閉鎖的な社殿があることが解かる。今、仮に前者を「前室開放型」、後者を「前室閉鎖型」と呼ぶことにする。

前室開放型社殿の特徴

前室　前室の正、側面３方全てを格子戸、蔀戸等の開放的な建具とする。社殿によっては全く建具を設けず三方吹放しとするものもある。内法長押は廻さないのを基本とする。身舎とは繋虹梁、飛貫で繋ぎ竹の節欄間を飾る場合もある。

組物は全て出三斗組で中備えは蟇股を置くことが多い。頭貫上の琵琶板や小壁は張らず開放とする。前室中央間の出三斗組には手挟を組む。ただし向拝の手挟よりは彫刻は簡素にするのを通例とする。

軒は樓羽が地垂木、打越垂木の二軒であるが小壁を張らないので前室内部もそのまま連続して二軒とする。

中世近江地方の前室付社殿一覧表

●印：国宝　無印：重要文化財　※：県指定有形文化財

番号	名称	建立年代・資料	所在地	備考
1	●苗村神社西本殿	徳治３年(1,308)・棟札	蒲生郡竜王町	前室開放型
2	押立神社本殿	応安６年(1,373)・棟札	愛知郡湖東町	〃
3	鏡神社本殿	南北朝 —	蒲生郡竜王町	〃
4	勝手神社本殿	応永７年(1,400)・棟札写	蒲生郡竜王町	〃
5	大笹原神社本殿	応永21年(1,414)・棟札	野洲郡野洲町	〃　、入母屋造
6	春日神社本殿	文安元年(1,444)・棟札	愛知郡湖東町	〃
7	大行社本殿	文安４年(1,447)・墨書	愛知郡秦荘町	〃
8	油日神社本殿	明応２年(1,493)・棟札	甲賀郡甲賀町	〃
9	高木神社本殿	室町時代後期 —	蒲生郡蒲生町	〃
10	高木神社境内社、日吉神社本殿	永正９年(1,512)・厨子扉銘	蒲生郡蒲生町	〃
11	奥石神社本殿	天正９年(1,581)・棟札写	蒲生郡安土町	〃
12	※石塔寺三重塔	文永３年(1,266)・棟札写	大津市	前室閉鎖型
13	●園城寺新羅善神堂	貞和３年(1,347)・文書	大津市	〃
14	神田神社本殿	明徳元年(1,390)・棟札写	大津市	〃
15	※若宮八幡神社本殿	明応２年(1,493)・棟札	高島郡安曇川町	〃
16	勝部神社本殿	明応６年(1,497)・棟札	守山市	〃　、春日造
17	地主神社本殿	文亀２年(1,502)・棟札	大津市	〃
18	宇和宮神社本殿	永正２年(1,505)・棟札	栗太郡栗東町	〃
19	小津神社本殿	大永６年(1,526)・棟札	守山市	〃

床は縁長押上端揃いの拭板敷きとする。身舎の床が縁長押上の踏込板の上にさらに設けられた中段長押の高さになるのに対し対照的である（以下この様に長押を二段に張り縁より高く床を構えるのを中段長押構えと呼ぶこととする）。また前室床と身舎側の縁は同一の高さとなるので高欄は結果的に前室側の架木、平桁、地覆が各々身舎側の平桁、地覆、縁板に納まることになる。

身舎　3×2間の身舎の最大の特徴は両側面前端間に必らず幣軸付板扉を開くことである。

組物は舟肘木とする例が3棟あるが他は全て出三斗組または平三斗組を基本とする。中備の蟇股を外廻りに飾る例は流造ではないが、身舎正面すなわち前室との境に飾る例が室町時代後期の社殿で見られる。同時にこの頃には格狭間や盲連子窓などの装飾細部も身舎正面を賑やかす様にもなる。こうした点は時代が降るにつれ前室がより開放的な構造になってゆくことと関係がある様に思われる。

分布地域　分布図に示した通り前室開放型社殿11棟は全て野洲川東岸の野洲郡、愛知郡、蒲生郡、甲賀郡にそれぞれ分布している。

以下年代順に各遺構の特徴を見て行き前室開放型社殿の変遷の跡を辿る。

○苗村神社西本殿（徳治3年）　国指定では最も古い遺構で前室開放型の古式を残す。例えば身舎組物を舟肘木とし扉を右側面のみとしたり前室の床を中段長押構えとすることなどである。蟇股は向拝と前室正面中中央間のみに飾り両端間は蓑束とする。

○押立神社本殿（応安6年）　苗村神社に続く遺構でこの社殿から身舎両側面前端間に幣軸付板扉が設けられる。しかし前室の床は中段長押構えとするなどは古式である。また苗村神社同様向拝、前室中央に蟇股を置くが竹の節欄間が新たに加えられた。

○鏡神社本殿（南北朝）　苗村神社とともに身舎組物を舟肘木とする。前室に内法長押を廻し一部小壁を張るなど乱れがあるが後補部材も多い。前室の床はこの建物以降全て縁長押天端揃えとなる。なお向拝を3間とする3棟のうちでは最も古い社殿である。

○勝手神社本殿（応永7年）　向拝を3間とする他平面規模も鏡社と良く似る。蟇股は向拝3間に飾るが前室には設けず竹の節欄間を飾る。前室開放型社殿は同社で完成したと言って良く図面と写真を参考例として掲げた。

○大笹原神社本殿（応永21年）　屋根は入母屋造であるので棟は他の流造の様に身舎の中央ではなく側面3間の中央に通るが平面の基本は全く前室開放型である。相異する点は内法長押を廻す事と流造では身舎両側面に設けられる扉が右側面のみという事などである。また同社は正側面各柱間に蟇股を飾る他竹の節欄間や脇障子など優れた意匠の彫刻を持ち中世の滋賀県の神社本殿建築の頂点として良いであろう。

○春日神社本殿（文安元年）　身舎組物を舟肘木とするが後補部材の可能性もある。平面、構造も典型的な開放型である。向拝、前室を面3間に蟇股を飾る。

○大行社本殿（文安4年）　もとは近くの金剛輪寺の鎮守社であったものを明治に移築したもので細部意匠において金剛輪寺本堂に似る所もある。注目すべきは前室身舎境の装飾性が高くなった事で蟇股、格挟間を身舎正面3間に置く。

○油日神社本殿（明応2年）　前室開放型では最も大規模な社殿。組物は平三斗組として内法長押を前室に廻し床も中段長押構えとするなど開放型とするにはなじまない点もあるが建具関係などは基本的に同じである。甲賀郡という地域性も考えなくてはならない点がある。

○高木神社境内社日吉神社本殿（永正9年）　現在前室には三方格子戸を嵌めるが以前はなく吹放しであった。また身舎正面両端間は白壁である。

○高木神社本殿（室町時代後期）　日吉社と並んで建つ。ひと廻り大きいがほぼ同時期の建立にない向拝を3間とする以外は日吉社に酷似している。やはり以前前室は開放で身舎正面両端間を白壁とする。

○奥石神社本殿（天正9年）　棟札写しより天正の建立となっているが、応永30年の墨書のある神輿小組天井が本殿の格縁に納まる事や先の大笹原社と細部意匠が非常に良く似ることより応永の建立と見てよい。天正は現在の姿に改造された時期であろう。同社は前室に一切の建具を置かず三方吹放しとするが、身舎正面隅柱の正面側には飛貫の埋木や戸当りの風蝕差があり応永当初には建具で囲っていた可能性がある。なお、身舎正面両端間に盲連子窓を置くのは唯一の例である。

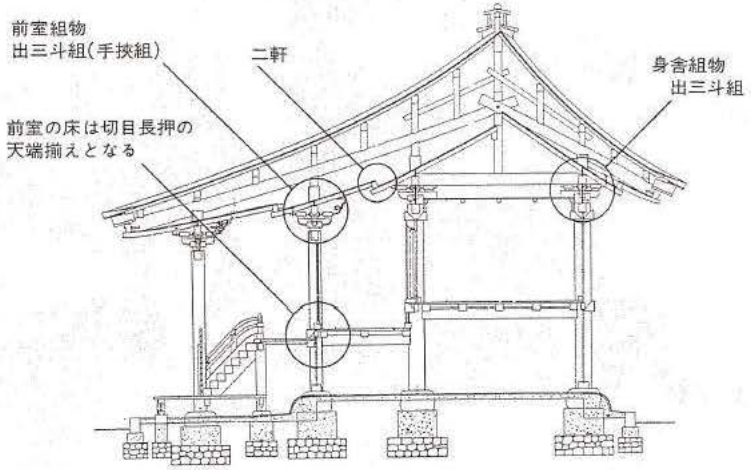
前室閉鎖型社殿の特徴

前室　前室の正面のみ格子戸、蔀戸等を設けるが両側面は基本的に壁とする。側面は後に板扉を設ける遺構もあるが前室開放型とは根本的に扉の位置が違う点に注意すべきである。内法長押は正側三方に廻し組物間の琵琶板や小壁は必らず張っている。

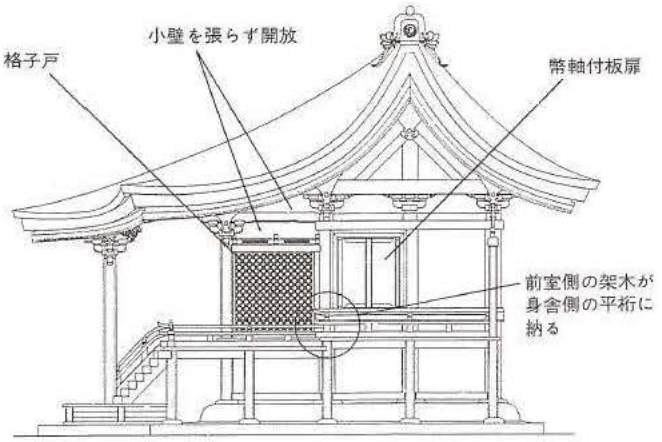
組物は湖西の2棟を除き舟肘木を基本とし後に出三斗組となる。しかし中央間には手挟を必要とするが省略されている。

軒は樓羽二軒であるのに対し前室内部は小壁を境に一軒に省略される。

床は中段長押構えとし前室開放型よりも縁との高低差は大きい。そのため縁の前室、身舎境の差も大きくなり前室側の高欄架木が身舎側の地覆または縁板に納まる結果となっている。

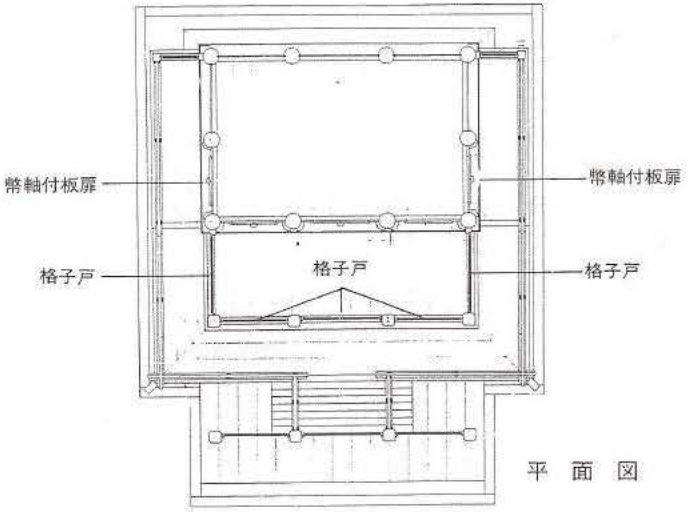


梁行断面図



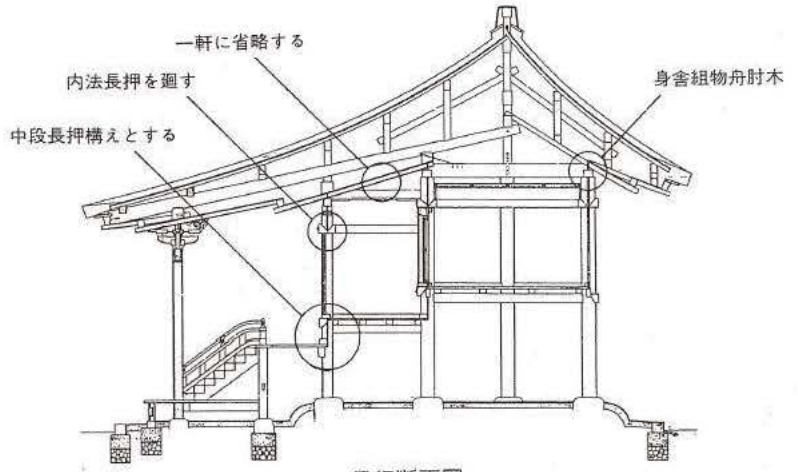
側　面　図

勝手神社本殿全景

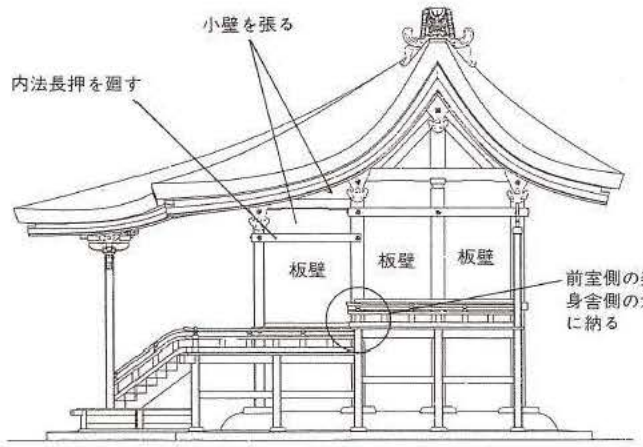


平　面　図

前室開放型の特徴(勝手神社本殿)

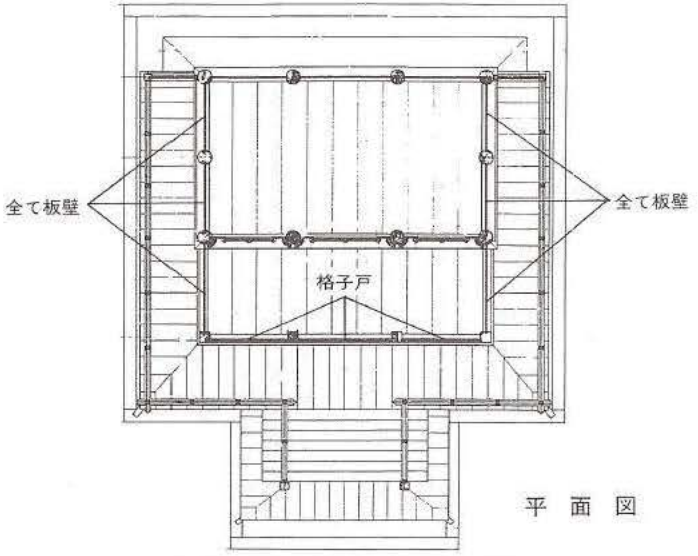


梁行断面図



側　面　図

神田神社本殿全景



平　面　図

前室閉鎖型の特徴(神田神社本殿)

なお前室全体を見た場合身舎に対し一段下ってはいるが、その構造は基本的に身舎と同じである事を注意しておきたい。

身舎　前室開放型が必らず両側面前端間に扉を開いたのに対し閉鎖型は全て壁とする。

組物は湖西の２棟は出三斗組とするが他は全て舟肘木である。よって身舎正面に蟇股を飾ることもなく全体に装飾性は低く簡素な印象を与える。

分布地域　開放型が主に湖東方面であるのに対し湖南湖西方面に９棟分布する。野洲川の西岸の旧野洲郡（守山市）、栗太郡、旧滋賀郡（大津市）、高島郡の各地方である。

以下開放型同様年代を追って遺構の特徴を見て行く。

○石坐神社本殿（文永７年）　県指定文化財であるが文永の棟札写しが正しければ全国最古の前室付社殿である。前室の各柱や建具、組物など近世に大きく取替えられているので当初の平面形式を推定することはできない。だが身舎については古い柱もあり現在とほぼ同じと考えても良さそうである。

○園城寺新羅善神堂（貞和３年）　前室閉鎖型最大の社殿で前室には透彫の欄間を飾る。園城寺北院の鎮守という事で他の在郷神社とは背景が異なり完全には閉鎖型として分類しえない点もある。

○神田神社本殿（明徳元年）　前室は正面のみ格子戸とし側面は壁とする。組物は身舎を含めて舟肘木で床は中段長押構えとする。その他前室閉鎖型の特徴を良く備えており一応当社で閉鎖型が完成したとしておく。

○若宮神社本殿（明応２年）　先の神田社から約百年の間の室町時代中期の閉鎖型の遺構は残っていない。湖西の安曇川に位置する県指定文化財で閉鎖型最小の遺構である。前室正面は桟唐戸、格子戸とするが側面は板壁である。組物は出三斗組とし蟇股を用いる。

○勝部神社本殿（明応６年）　前室は正面に蔀戸を吊るが両側面は板壁から幣軸付板扉となった。組物は向拝のみ出三斗組とし前室、身舎ともに舟肘木とする。床は中段長押構えとする。

○地主神社本殿（文亀２年）　屋根は全国でも珍しい三間社の隅木入春日造であるが開放型における大笹原社同様平面は前室閉鎖型と大差ない。違う点は前室の両側面を板戸引違いとする事や身舎正面３間にも蟇股を飾り手挟も省略しないなど、前室内部の装飾性が簡素な他の閉鎖型に比べ高い点である。全体の意匠の特異性からして無理からぬ所であろう。

○宇和宮神社本殿（永正２年）　地理的にも勝部社に近く平面も良く似ていて前室両側面に幣軸付板扉を開く。相異する点は前室の組物が舟肘木から出三斗組に変った事や同時に竹の節欄間を飾るなど前室外廻りの装飾性が少し進んだ事である。しかし内部ではやはり軒は一軒となり手挟は省略されている。

○小津神社本殿（大永６年）　宇和宮社より発達したのは身舎を前後に分け内々陣を設けたことにより、前室側面にあった幣軸付板扉を身舎右前端間に移し前室側面は板壁とした点である。結果的に開放型と扉の位置が似る事になったが前室の構造には完全に異なっている。その他前室側面にも蟇股を置くなど前室外廻りの装飾性はより高くなっているが宇和宮社同様内部の手挟は全く省略されている。

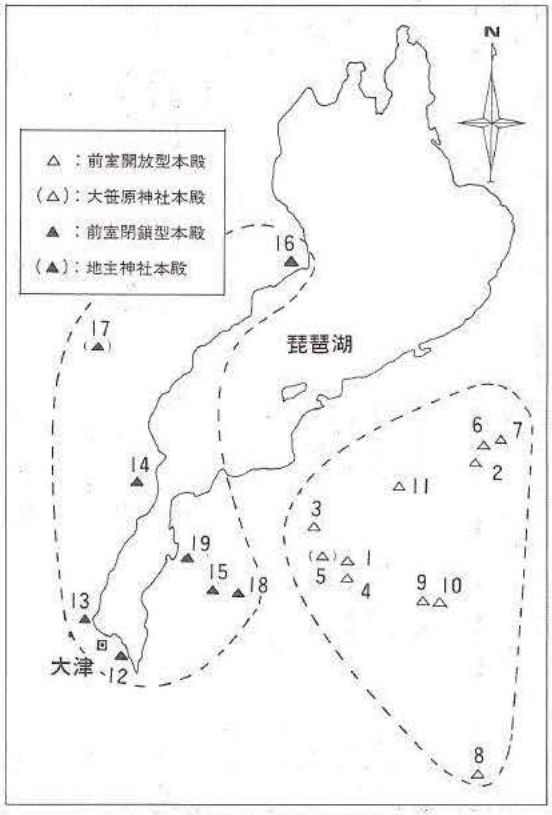
おわりに

以上中世における滋賀県の前室付社殿について２つの系統が存在し、それぞれは地域的に片寄って分布することを示した。こうした事が何故生じるのか今の所全く不明である。

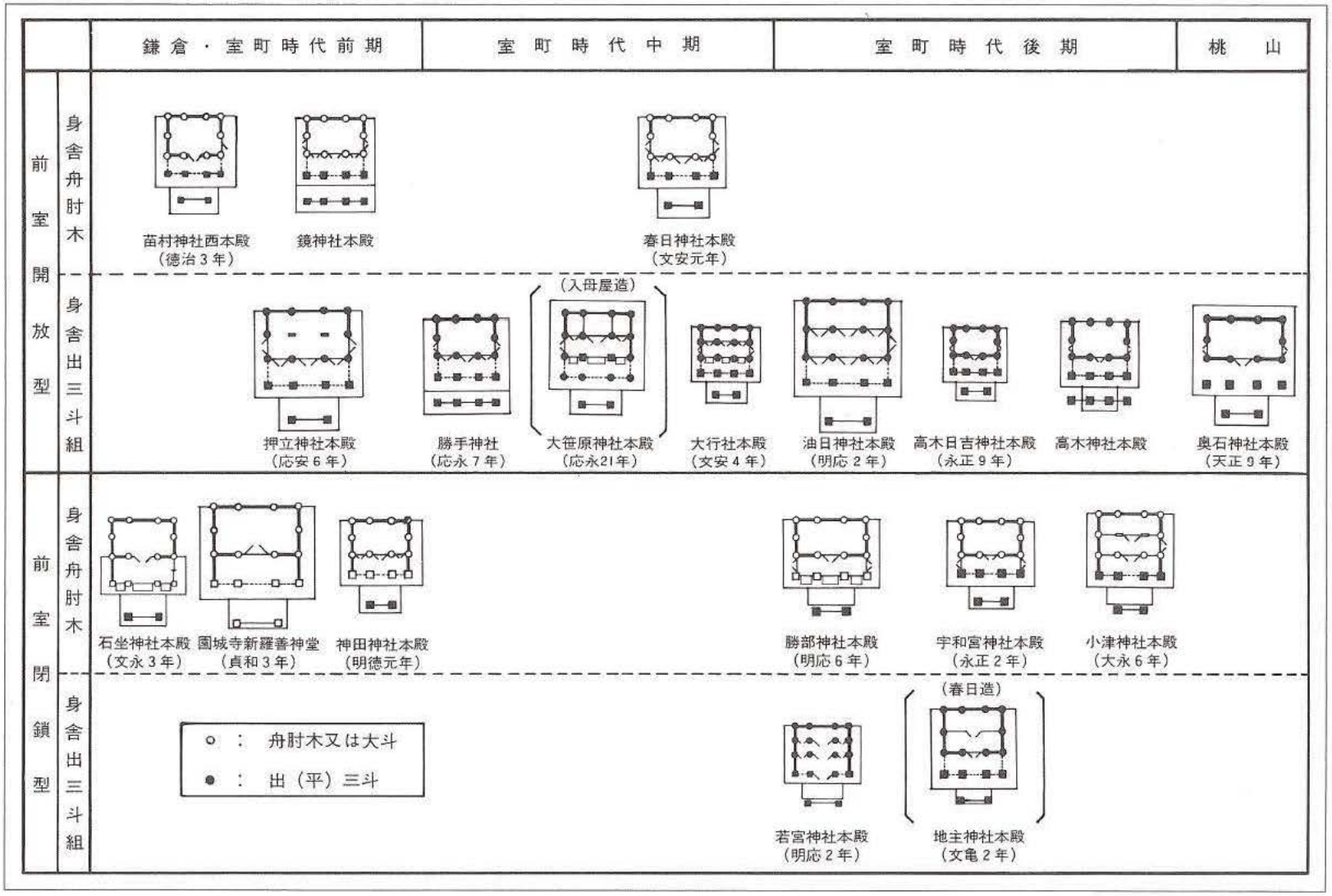
宗教儀礼上の故か、それを作る大工職の相違なのか、拝殿等の付属建物と関連があるのかなどの問題があるかも知れない。また他府県の前室付社殿や県下の大が外陣に入る事が出来る大型一間社との比較検討なども必要と思われる。

参考文献：大上直樹　「中世近江地方の三間社流造本殿の平面形式について」（日本建築学会大会学術講演梗概集　1979．９）

（大上　直樹）



前室付社殿の分布図


鎌倉・室町時代前期
室町時代中期
室町時代後期
桃山
前室開放型
身舎舟肘木
苗村神社西本殿
（徳治３年）
鏡神社本殿
春日神社本殿
（文安元年）
身舎出三斗組
押立神社本殿
（応安６年）
勝手神社
（応永７年）
（入母屋造）
大笹原神社本殿
（応永21年）
大行社本殿
（文安４年）
油日神社本殿
（明応２年）
高木日吉神社本殿
（永正９年）
高木神社本殿
奥石神社本殿
（天正９年）
前室閉鎖型
身舎舟肘木
石坐神社本殿
（文永３年）
園城寺新羅善神堂
（貞和３年）
神田神社本殿
（明徳元年）
勝部神社本殿
（明応６年）
宇和宮神社本殿
（永正２年）
小津神社本殿
（大永６年）
身舎出三斗組
○ ： 舟肘木又は大斗
● ： 出（平）三斗
若宮神社本殿
（明応２年）
（春日造）
地主神社本殿
（文亀２年）

前室付社殿の略平面図